

貫高

に成、人力を盡し、金銀を用れば可起返分、御取ヶ帳郷帳、其外諸帳面等に、連々可起返引高之分と記すを連々引と云、右之内にも海成大池成、大石入等、縱令何程金銀を入、夫力を掛たり共、可起返仕方雖無之、爲人用拵たる引物に無之、天地自然に出來たる損地故、不及人力には儀ながら、天變を以、又元之地所に成べき事も不知に付、可起返引物之内に入れ、高内引に致置事なり。

〔地方凡例録一〕一貫高之事 附 六貫定之軍役一騎人數之事

貫高は、鎌倉將軍家之末京都將軍家之始より、田地に貫高と云事始り、知行領地、此貫高を用ひ、東國西國一統に行れし事也、北條相摸守時宗之時代に起り、足利尊氏公の頃より、専ら行れし事と見へたり、貫といふは永錢の貫文にはあらず、軍役之定メを田地之坪に割附しより起り、六貫一疋と云事あり、田地千坪を壹貫と定め、六千坪を六貫とす、此六貫之地より、軍役一騎を勤る、中略六千坪は壹町六反貳百四拾坪なれば、軍役の積り六、敷ニ付、尊氏公時代より壹反三百歩に直り、貳町歩に而六貫なるを以、壹騎役直に分る、古へ士之知行、貫高以前は田畑之町歩を以、宛行ひ、足利將軍家以後、何百何拾貫と家祿定り、石高始りたる時代迄、都而貫高ニ而致領知、幾千貫幾百貫と云事、當時も民間之詞に残り、苗を百目苗、壹貫目苗と百姓方に而唱、田地百坪ニ苗百把植、是を百目と云、千坪に千把を壹貫目苗と唱、一万坪に拾貫目苗に當り、凡田壹歩、粃壹升と積り、拾貫は粃百石、百貫千石之當り、三百貫之知行、田地百町、粃高三千石、當時之石高十五之石盛に准じて、高千五百石、粃數ニ而も五合摺、五公五民五ツ取ニ積り、高千五百石也。中略右貫高、今も武州相州上州邊には稀に有之、石高は元來無之、多くハ無反別之村也、貫高永高共、御入國以來、壹貫を高五石替之勘定御定法に成る、然る處武州久良岐郡杉田村、貫高之割付見請たるに、永壹貫文を高貳石替之積也、然バ村に寄仕來有之、都而五石代共不相見、扱又關東には永高と申儀有之、鎌倉邊寺社領は何れも永高也、又村高にも永高有之、處、貫高と永高致混雜、既に當時は一事兩名之様に心